

魏志倭人伝を考える  
—絹・絹織物について—

1 はじめに

「魏志倭人伝」には、倭人の社会生活の様子を記した条に倭人が蚕を飼い、絹織物を作っていたことが記されている。その部分を抜粋すると、「禾稻、紵麻を種え、蚕桑緝績し、細紵・縑緜を出す。」である。

「禾稻」はイネである。「紵麻」の紵は麻の一種の「苧」で、カラムシのこと。「種え」は栽培すること。「蚕桑」は桑を栽培し蚕を飼うこと。「緝績」は紡ぐこと。「細紵」は紵で細密に織った麻布のこと。「縑緜」の「縑」は緻密に織った絹織物で「かとりぎぬ」のこと。「緜」は「真綿（まわた）」のこと。すなわち、倭人は、イネ、カラムシ、麻を栽培し、桑を栽培して蚕を飼い、これを紡ぎ、カラムシや麻の茎皮の繊維で布を織り、紡いだ絹糸で緻密な絹織物を織り、真綿も作っている、ということである。さらには倭国で生産した絹織物等を皇帝への朝貢品として魏に贈っていたことが記されている。その部分は、「その4年（少帝の正始4年。243年）、倭王、また使大夫伊声耆・掖邪狗等8人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・縑衣・帛布・丹・木拊（木製のゆづか。「拊」の原文は彡偏）・短弓矢を上献す。」である。数量は記されていないのでわからないが、献上品八品のうちの倭錦・絳青縑、縑衣、帛布の4品は絹製品である。倭錦は、倭で作られた錦という意味で、錦は様々な色糸を用いて織り出された絹織物、絳青縑は経と緯の糸の色が異なった布で玉虫織の薄手の絹織物、縑衣は真綿を入れた衣服のこと、帛布は碧玉のように美しい白絹の織物のことである。

このように倭人は、自ら養蚕を行い、絹糸を紡ぎ、緻密な絹織物を織り、これを着用し、さらに、中国には及ばないにしても高度な技術を取得し、養蚕・絹織物の発祥地である中国の魏に献上するほどの絹製品を作っていたのである。この項ではその養蚕及び絹織物について考える。

2 絹と絹織物

(1) 絹

a カイコの生態

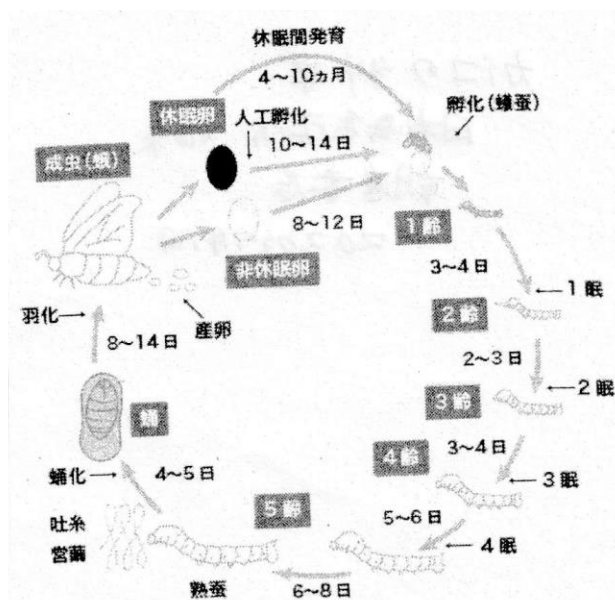
絹は独特の光沢と滑らかな質感をもっており、衣服の材料として珍重され、絹織物は古くから人々の憧れの織物であった。その絹は、蚕の繭からとった動物繊維で、1個の繭から800メートル～1200メートル、約3グラムの繭糸がとれるが、非常に細いので何本か束ねて織物の原糸となる生糸が作られる。1着の着物を作るのに30万メートル以上の長さが必要と言われる。

蚕は、カイコガ科の昆虫である。カイコガ科はほとんどがアジアにのみ生息するグループで、日本には4属5種が生息している。カイコガ科の昆虫のうち、クワコは、幼虫の食草が桑で、蚕と交配して一代雑種を作ることが可能であり、このことからクワコが蚕の祖先種であると考えられている。クワコは、生息範囲が限定されており、日本のほか極東ロシア（沿海州）、中国本土、朝鮮半島、台湾に分布している。蚕はこれらのうち中国の長江下流域で野生のクワコを交配し、家畜化されたものと考

えられており、野生には棲息していない。野生のカイコガ科のクワコ、シンジュサン、クスサン、ユナグニサンなどからも絹が取れるがこれらは野蚕絹という。これに対して家畜化された蚕から作られる絹は家蚕絹という。家畜化された蚕を家蚕といい、日本種、中国種、欧州種、熱帯種及び朝鮮種に分類される。家蚕は、系統学的な解析では約 5000 年前には作出されたと考えられており、性質はおとなしく、幼虫時代のいわゆる芋虫形態の時も飼育箱から逃げ出すことがないし、成虫には羽はあるが、退化していて飛ぶことができない。人為的な保護、育成がない限り生存していくことができない生物である。

蚕の生態サイクルは、卵から孵化し、幼虫になると、与えられた桑（葉）を食べて成長する。その食欲は極めて旺盛で、飼われている多くの蚕が一齐に桑を食べるときは雨が降っているような音がするほどである。蚕は4度の脱皮を繰り返し、そのたびに大きく成長する。脱皮する前には、桑を食べることを止め、動きを止めるが、これを眠という。4度目の脱皮の後、65～85 ミリメートルほどになると食べることを止め、繭を作り始める。この時に<sup>まぶし</sup>簇（40×50×高さ 20 ミリメートルほどの仕切り）に移すと、自分の周りに糸を吐き、2～3 日で 20×30～35 ミリメートルのほどの細長い円形の繭を作る。この中で最後の脱皮をし、10 日ほどで黄褐色の蛹になる。この繭を簇から採取し、煮沸して糸を取り出し、数本をより合わせて生糸にするのである。生糸を取らないと、繭の中からカイコガが出てきて、交尾をし、メスは、500～700 個の卵を産むが、カイコガは口吻が退化しているため食べることができず、1 週間ほどで一生涯を終える。卵から孵化して1 か月半ほどの短い一生である。このサイクルを図示すると図1 のとおりである。

図1 カイコガの生態サイクル



注 「カイコの科学」日本蚕糸学会編集による。

この図のサイクルは、現在の養蚕において行われているものであり、弥生時代の養蚕がどのように行われていたかは明らかではないが、カイコガの一生のサイクルは変わらないものであったと考

えられる。

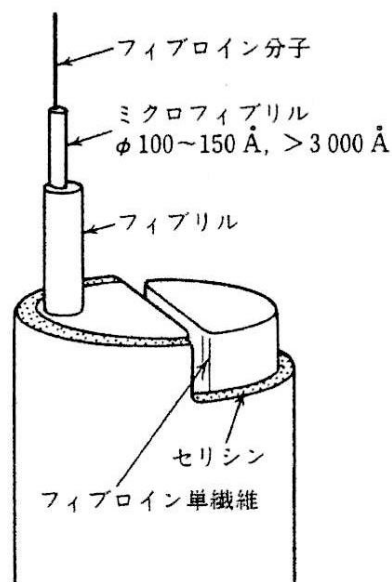
また、この図は4回眠し脱皮する四眠蚕の場合であるが、3回の眠・脱皮で繭を作る蚕もいる。これを三眠蚕と言い、朝鮮種である。古代の絹の専門家である布目順郎氏は日本の古代の絹には、四眠蚕のほかにこの三眠蚕による絹を使ったものがあり、楽浪郡から渡来したものと述べている。

## b 生糸

カイコが作る繭の糸（「繭糸」という。）は、極めて細く、かつ精巧にできている。その主成分はフィブロイン（70～80パーセント）とセリシン（20～30パーセント）というタンパク質で、このほかにはロウ質、炭水化物、無機質等（2～3パーセント）がわずかにふくまれている。一本の繭糸は、鈍角三角形様の二本のフィブロインをセリシンが接着し覆っている構造である。一本のフィブロインはさらにフィブリル（0.2～0.4マイクロメートル（ $\mu\text{m}$ ）。0.0002～0.0004ミリメートル）数百本から成る集合体で、フィブリルはさらに微細なマイクロフィブリル（直径0.01～0.02 $\mu\text{m}$ ）の集合体である。セリシンは4層からなり、外側の層ほど熱水やアルカリに溶けやすい性質を持ち、生糸を作る際に接着剤の働きをする。

蚕が作った繭から織物の原糸となる生糸を作るのであるが、このために繭を沸騰しない程度に煮て、ほぐし、繭糸の糸口を手繰りだし、これを目的の太さに合わせて何本か撚り合わせるとセリシンの働きでお互いに接着するので、これを枠に巻き取ると長い一本の糸（「生糸」という。）ができる。この生糸を作る工程を製糸という。

図2 繭糸の構造



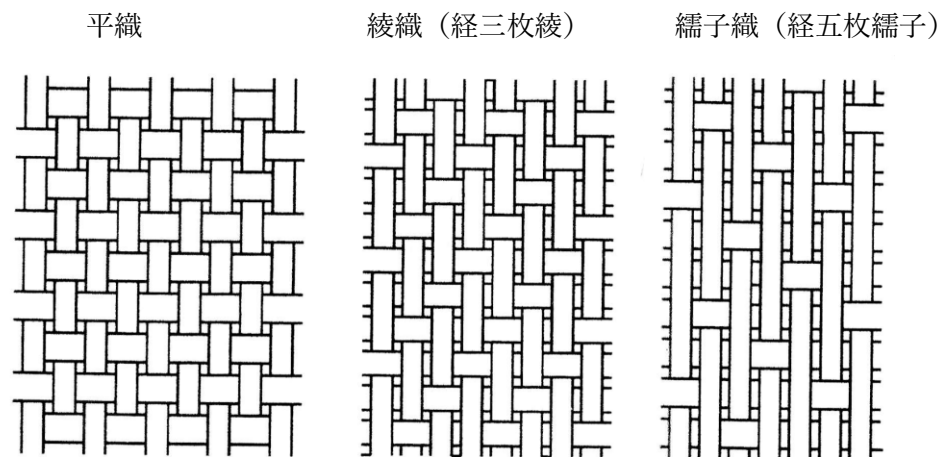
注 「第2版 繊維便覧」繊維学会から作成した。

ちなみに、日本の養蚕業は、近年衰退の一途をたどり、今では産業としての形態を完全に失い、国内から姿を消そうとしている状況になっている。明治維新から第二次世界大戦前くらいまでは日本の主力輸出品として隆盛した養蚕業であったのに寂しい限りである。

## C 絹織物の三原織

ここで絹織物の織り方について若干述べる。生糸を使って、布を作るのであるが、この工程を織オリといひ、出来上がった織物を絹織物という。織にはいくつかの種類があり、最も基本的な織は、平織で、経糸タテと緯糸ヨコが一本ずつ上下交互に交差して組み合わせられた織である。平織のうち上質の糸で目を緻密に固く織った絹布を縑シロ（「かとりぎぬ」ともいう。）といひ、これに対して粗い絹布のことを縹アシギヌといひ、律令時代には調（調縹）に用いられた。次に、綾織（斜文織ともいう。）は経糸が2本もしくは3本の緯糸の上を通過した後、1本の緯糸の下を通過することを繰り返して織られる織り方である。縷子織（朱子織ともいう。）は、経糸が緯糸を4本以上飛び越えて構成される織り方である。この3つの織り方を織物の三原織というが、弥生時代の織物は、絹、麻を問わず平織ばかりである。

図3 織物の三原織の模式図



注 「文化財の世界—伝統文化・技術と保存科学—」奈良文化財研究所による。  
一部改変している。

## (2) 絹の歴史

### a 養蚕の起源

養蚕は、一説では、紀元前 6000 年ごろの中国で始まったとも言われているが、遺跡から出土した遺物から見ると、中国の長江下流域の河姆渡遺跡の紀元前 4000～4500 年の地層から蚕 6 頭の形と山形紋を刻んだ杖の頭飾りが出土しており、この頃には既に養蚕が行われていたと考えられる。中国の山西省夏县西陰村遺跡の BC2500～2000 年の地層から一部が切り取られた繭殻、紡錘車（世界大百科事典 2009 年改訂新版による。）が発見されている。布目順郎氏は、繭の中の蛹を取り出して食料とし

た可能性も指摘している。殷、周、漢時代の古墓からは玉、骨、陶土、金、銀などで作られた蚕や蛹の模造品がたくさん発見されており、蚕が王侯にとって冥界まで支配する重要な存在であったことが窺われる。文字を記した遺物では、殷墟（中国殷王朝後期である BC14 世紀～BC11 世紀ごろの都の遺構）から出土した甲骨文字の中に、蠶、絲、桑、繭といった養蚕にかかわる文字が認められている。遺跡から出土した最も古い絹織物は、もちろん世界でも最古の絹織物であるが、中国浙江省湖州市南方の銭山漾遺跡から出土した BC2750 年と推定される平織絹片、撚糸、絹繩等である。絹織物に刺繍が施されるようになったのは、戦国時代（紀元前 3 世紀～5 世紀）からで、この時期の墓から刺繍した絹織物が発見されている。中国湖南省長沙東郊にある紀元前 3 世紀の馬王堆漢墓からは綺（地は無紋の平織で、四枚綾織で模様を出す織り方）、綉（刺繍）、紗（薄く透き通る平織の絹織物）、錦などの精巧な絹織物が発掘された。また、布目敏郎氏は、殷代、周代から漢代にかけての遺跡から出土した絹繊維の断面の完全度（扁平度）及び断面度の研究から様々な形状の異なる絹が存在していることを確認している。このように養蚕と絹織物の技術は中国で長い年月をかけて改良され、向上・発展してきたのである。

養蚕技術が文献に現れるのは、前漢晩期に成立した中国最古の農書である「汜勝之書」（BC 1 世紀。汜勝之撰）である。同書は前漢時代の農業に関する個々の作物の耕作方法、播種、種の処理・保存など多岐にわたる内容を記したもので、この中に桑についても詳しく記されていた。なお、現在は散逸しているが、内容は後に撰ばれた多くの農業書に引用されている。

ちなみに、養蚕の起源については、多くの伝説があり、その中でよく知られているものに、元の王禎が撰した「農書」（1313 年）巻 6 に「淮南王蚕経に伝う。黄帝元妃西陵氏始めて蚕す。蓋し黄帝衣裳を制作る。因て此に始まる也」という文章があり、これが中国の養蚕の始源として広く引用されている。黄帝は伝説上の皇帝である。殷の前に夏王朝（BC1900 年ごろ～BC1600 年ごろと推定）があり、さらにその前に五帝時代があり、その五帝の一人が黄帝とされている。夏王朝は近年の二里头遺跡（BC1800 年～BC1500 年頃と推定）の発掘により実在の可能性が出てきたと言われており、中国では非常に古くから養蚕が行われていたことが想像される。なお、漢代の司馬遷が書いた「史記」（BC91 年頃。司馬遷撰。中国二十四史の第一）にも「黄帝妃養蚕を愛す」の文章がある。このほか養蚕の始まりに関する伝説には、「太古蚕馬記」（3 世紀ごろ。張儼の撰）などにもある。

## b 養蚕の伝播

絹は高価な交易品として古くから西方へもたらされていたが、前漢時代にシルクロードが開設されるとさらに盛んになった。シルクロードは、前漢の武帝（BC141～BC87）が前漢の北方を脅かしていた匈奴を挾撃するために張騫を西域の大月氏国に派遣したことにより、西域の実情が知られるようになり、対匈奴戦略が進展するとともに西域諸国との通商・交易が盛んにおこなわれるようになったことから始まる。シルクロードは、西域諸国からさらに西に延びパルチア（ペルシャ）、大秦国（ロ

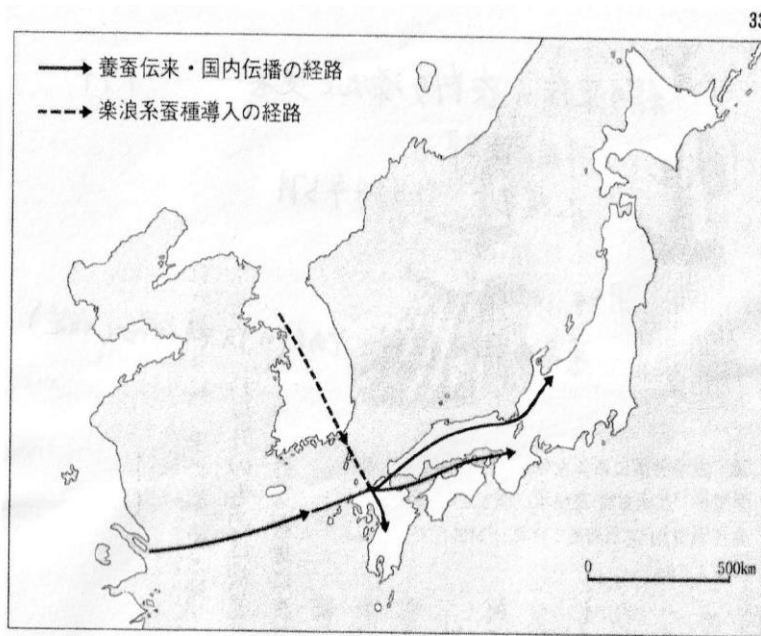


完全度が日本的で小さいことから日本製と判断している。このことから日本への養蚕・絹織物の伝播は弥生時代前期には既に伝わっていたと考えられ、中国から西域への伝播より早いことになる。

なお、織密度は、1センチメートルの間の経糸と緯糸の数である。(経糸数) × (緯糸数) で表す。数が多いほど織が緻密であることを示す。断面完全度(繊維の扁平度)は、繊維の断面の最長径を直径として描いた円の面積に対する繊維の断面積の百分率で示す。円形の繊維は100パーセントとなる。繊維断面積は、繊維の実断面積である。

日本への伝播の経路については、布目順郎は、弥生前期から中期前半までは、出土する絹が華中の絹に近い繊維断面積であることから華中から東シナ海を越え、直接北部九州に伝えられたものであろうとし、中期中葉からは楽浪的なものが加わることからこのころからは楽浪郡からも朝鮮半島経由で技術が伝わったことも認められるとしている。

図5 日本への養蚕の伝播経路



注 「絹の東伝—衣料の源流と変遷—」布目順郎による。

### 3 絹織物と邪馬台国

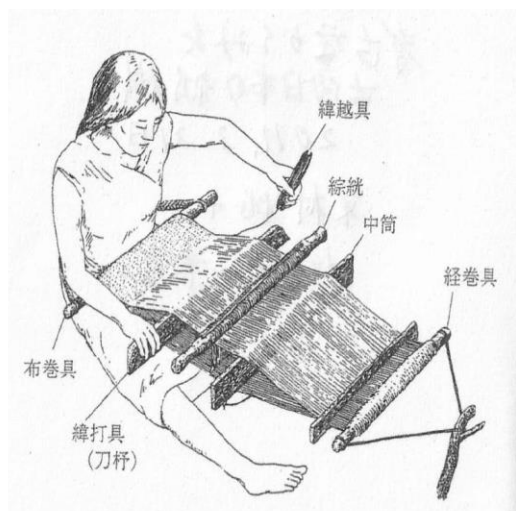
#### a 弥生時代の絹織物

日本における編物・織物の最古の出土は、鳥浜貝塚(福井県三方郡三方町鳥浜。縄文時代草創期から前期。)から出土した縄・編物の残欠33点で、タヌキランのような植物から作った縄、大麻製の縄と編物、アカソのような植物から作った縄と編物、ヒノキ繊維の編物などであるが、このうち大麻製編物は、織物の可能性があるという(布目順郎「倭人の絹」)。そうであれば縄文時代草創期から前期ごろには大麻等の植物性繊維を材料として布が織られていたこととなる。

一方、織物機の出土は、1993年(平成5年)に雀居遺跡(福岡市博多区雀居 縄文晩期から古墳時代)の縄文晩期の溝状遺構のなかから多数の土器、木器とともに機織具の一部をなす緯打具二点が出土した。緯打具は経糸を縫って横に渡した緯糸を強く打ち締めて、縮まった布になるようにする織機

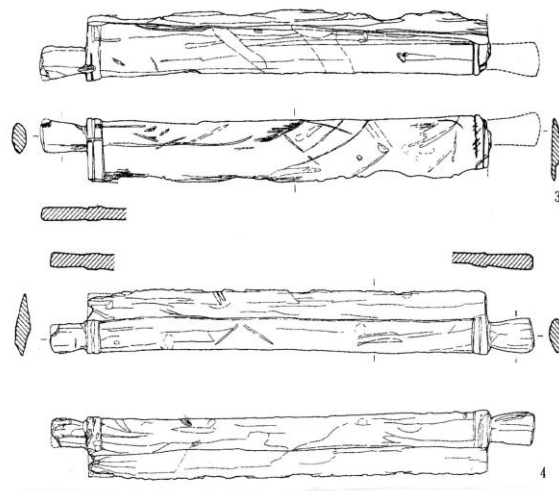
の部品である。当時は未だ養蚕は伝播していないと考えられるので、植物性繊維を使って布を織っていたものと考えられる。

図6 直状式原始機の復元図



注 「考古学から見た古代日本の紡織」  
東村純子による。

図7 雀居遺跡出土の緯打具 (2本)



注 「雀居遺跡3」福岡市教育委員会による。

倭国においては、遺跡からの出土遺物により機織具が縄文晩期には既に使用されていることが確認できるが、これを使って織った絹織物はいつごろから作られていたのだろうか。前述したとおり遺跡から出土した遺物では、有田遺跡から出土した絹布片が最古と判断されていることから、弥生時代前期には既に絹織物が製作されていたと考えられる。絹織物が作られる以前は麻、特に大麻が多く、そのほか苧麻、アカソ、タヌキラン、ヒノキ、藤、楮などの植物から得られた繊維から織物が作られていた。特に大麻はよく使われ、織物の技術も高いものがあったと考えられている。

絹織物を出土した遺跡は、弥生時代前期以降その数を増し、弥生中期には14遺跡、後期で4遺跡である。これらについて、布目順郎氏は、絹織物の織密度、繊維の断面積、繊維完全度を測定し、華中の遺跡や楽浪郡の遺跡から出土した絹織物と比較し、いずれも日本産の絹織物であると判断している。



表1 弥生時代の遺跡における絹とその繊維の性格（概略）

時期	遺跡名	織り密度	繊維断面計測値	
			完全度	面積
前期	有田	日本的（粗）	日本的（小）	華中的（大）
中期	初頭 吉野ヶ里 <sup>(1)</sup>	日本的（粗）	華中的（大）	華中的（大）
	前半 栗山 <sup>(5)</sup> 吉野ヶ里 <sup>(2)</sup> 比恵 吉武高木	日本的（粗） 同 同	日本的（小） 同 同	華中的（大） 同 同
	中葉 朝日北	日本的（粗）	日本的（小）	楽浪的（小）
	後半 須玖岡本 吉野ヶ里 <sup>(3)</sup> 門田 樋渡 立岩 三会村 栗山 吉ヶ浦	日本的（粗） 同 同 同	日本的（小） 同 同 同	華中的または楽浪的。または華中と楽浪の中間
	初頭 吉野ヶ里 <sup>(4)</sup> 栗山 <sup>(6)</sup>	日本的（粗） 同	日本的（小） 同	華中的または楽浪的。または華中と楽浪の中間
後期 終末 唐原 宮の前	日本的（粗） 同	日本的（小） 同	華中的または楽浪的。または華中と楽浪の中間	

備考 (1)SJ1777甕棺墓 (2)SJ1768甕棺墓 (3)SJ1002甕棺墓  
(4)SJ0135甕棺墓 (5)61号甕棺 (6)44号甕棺

注 「倭人の絹—弥生時代の織物文化—」 布目順郎による。

出土した絹織物は、いずれも平織であるが、その出土状況は、人骨に付着していたもの、銅剣、銅矛などやその柄などに錆着（錆びて強く固着）していたものなどがある。銅剣・銅矛などに錆着していたものは、これらを副葬する際に重要なものとして特に絹で被覆したり巻いたりしたものと考えられる。人骨に付着した絹は多くが、経糸・緯糸の間隔があいており、下の衣服や肌が透けて見える透目絹である。これらは遺体をくるんでいたものか、帷子を作って着せていたものではないかと推測される。このことは吉ヶ浦遺跡 52 号甕棺出土の人骨と朝日北遺跡出土人骨はほぼ全身に絹が付着しており、朝日北遺跡は脛骨のひざ下 15 センチメートルまで達していたこと、そのほかの遺跡出土の絹も上半身の肋骨などのほか脚部の大腿骨、脛骨にも付着していたことなどから推測できる。なお、遺骨に付着していた織物はすべて絹であり、麻は用いられていない。

表2 人骨付着の絹が出土した弥生遺跡

遺跡と甕棺番号	時期	年齢・性別	付着部位・長さ等	織り密度
栗山遺跡38号甕棺	中期前半	塾年♂	右大腿骨, 右腓骨, 左右肋骨	40×24
※栗山遺跡61号甕棺	中期後半	成年♀	右大腿骨	22×18
※栗山遺跡44号甕棺	後期初頭	塾年♀	右脛骨等, 広範	30×16
朝日北遺跡	中期中葉	塾年♂	肋骨他, ほぼ全身, 膝下15cm	43×27
吉ヶ浦遺跡52号甕棺	中期後半	13歳位 性別不明	全身	21×14
吉ヶ浦遺跡57号甕棺	中期後半	塾年♀	右大腿骨, 右脛骨, 肋骨	(30~40) × (20~30)

※印は比較的目の詰まった絹織物を付着するもの。他は透薄な絹を付着するもの

注 「倭人の絹」布目順郎から作成した。

なお、吉野ヶ里遺跡から出土した絹織物のうち、SJ1002 甕棺墓（中期中頃）と SJ0135 甕棺墓（後期初頭）からは、経糸に日本茜染め、緯糸に貝紫染めの錦様の染色があるものが、SJ0384 甕棺墓（中期中頃）からは貝紫で染色したものがみついている。魏の少帝の正始4年（243年）に倭王（卑弥呼）が倭錦を魏に献上しているが、倭国では、弥生中期には既に絹を染色し、錦を織る技術を持っていたのである。

表3 吉野ヶ里遺跡出土の染色した絹布

	地区名	出土遺構と時期	出土状況、布片の種類・特徴、その他
1	吉野ヶ里丘陵地区 V区	SJ1002 甕棺墓 中期中頃	棺内の把頭飾付き有柄細形銅剣に付着して絹布3種・大麻布1種が出土。絹布はすべて透目で、経糸に日本茜染め・緯糸に貝紫染めの錦様の染あるものあり。棺内から未確認。男性か。
2	吉野ヶ里丘陵地区 II区	SJ0384 甕棺墓 中期中頃	棺内人骨の右前腕に装着された状態の8個の貝殻製腕輪に付着して絹布片が出土。大半は貝紫で染色。棺内から未確認。男性の可能性大。
3	吉野ヶ里丘陵地区 II区	SJ0135 甕棺墓 後期初頭	棺内底部に崩れ落ちた人骨片に混じってイモガイ製腕輪1点とともに絹布と麻布片が出土。織りは絹が7種類、麻が2種類あり。絹布は透目

		で、経糸に日本茜染め・緯糸に貝紫染めの錦様の染色あるものあり。棺内に未確認。女性か。
--	--	--

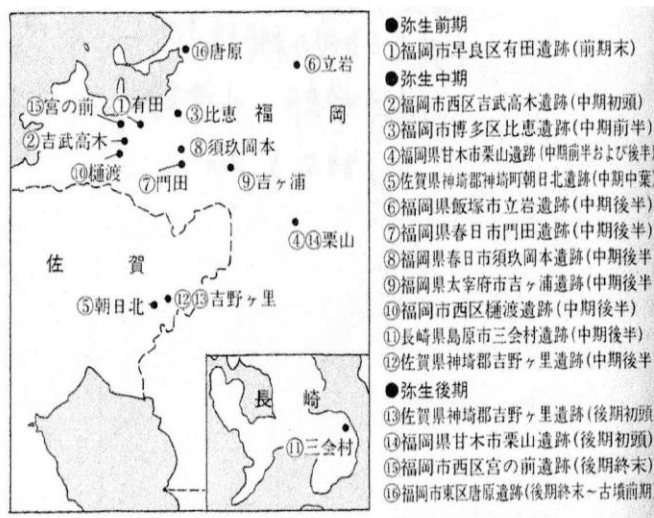
注 「吉野ヶ里遺跡—復元された弥生大集落—」(七田忠昭)の「表4 吉野ヶ里遺跡出土布一覧」から抜粋した。なお、絹布であっても染色が未確認のものは除外した。

## b 絹の東への伝播

弥生時代の絹織物の出土地を見ると図8のとおり、すべて北部九州の福岡県、佐賀県、長崎県に限られており、特に福岡県の西部に集中していることが分かる。この地域が絹の伝来地であり、養蚕及び絹織物生産の中心であったことが推測される。この地域から蚕、絹織物技術がその他の地域に伝播するのは、古墳時代前期になってからである。弥生時代前期末から終末期にかけての約400年の長期にわたって絹文化が栄えていたにもかかわらずその技術が北部九州にとどまっていたことは、稲作が速やかに西日本から東日本へ伝播していったことに比べると奇異でさえある。

布目順郎氏は、絹文化が北部九州以外に広まらなかった理由として、桑、蚕を育てるなど多大の気配りと手数がかかる面倒な仕事であるにもかかわらず、当時の絹織物はさほど良いものにはならなかった上に、既に麻織物の優秀な技術を持っていたから、敢えて絹織物を作る必要がなかったこと、絹は暖かさや肌触りがいいなどの特徴があるが、実際に身につけたことがなくその良さを十分に知らなかったこと、などではないかと述べている。同氏が指摘するように、絹はその良さが他地域に認識されていなかったことが原因と考えるが、また、養蚕、絹織物技術は稲作など食料確保に絶対的に必要な技術ではなく、優秀な麻織物技術を持っている弥生時代にはいわば上層の人々の嗜好的な品であり、経済的にもそれほどの余裕がなかったことから、多大な労力を投じて確保するほどのものではなかったのではなかろうか。古墳時代になり、支配者層が巨大な古墳を造営するほどの経済力、統率力、労働力を獲得するようになると、被支配者層に対して威信を示す財の一つとして、また、自らの欲求を満たすものとして絹を求めるようになり、これが絹文化拡大の要因の一つになったのではないかと考える。

図8 絹を出土した弥生時代の遺跡の分布

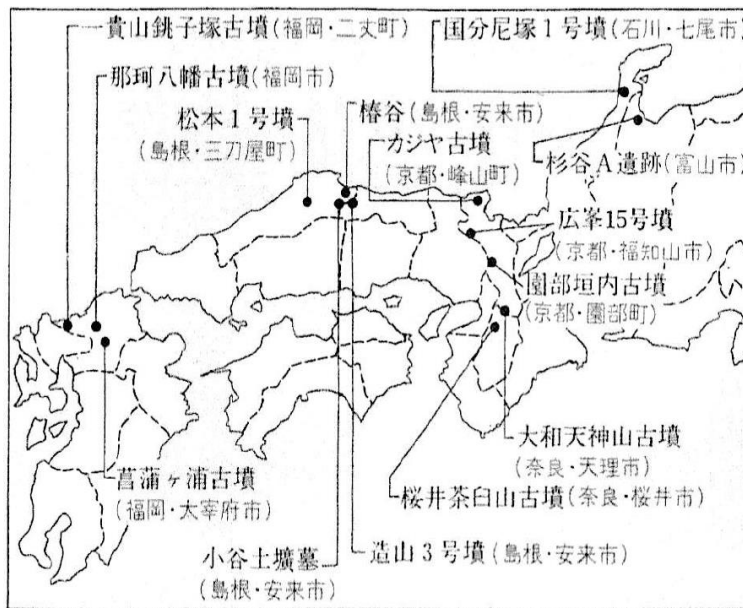


注 「倭人の絹—弥生時代の織物文化—」布目順郎による。

なお、本図と表1の遺跡の時代などが異なっている。その理由は分からないが、本図が「絹と布の考古学」1988年著作で、表1が「倭人の絹—弥生時代の織物文化—」1995年著作であり、その間の研究の結果と思われる。

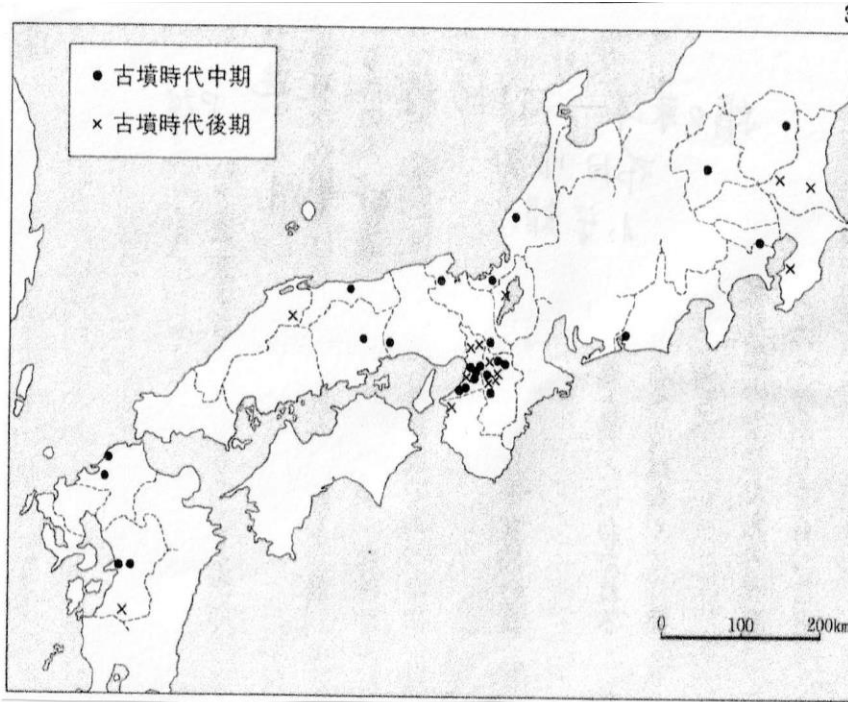
弥生時代に北部九州の遺跡でのみ出土した絹が、古墳時代になると、日本各地の遺跡から出土するようになる。古墳時代前期(図9)には九州地方が3遺跡(北部九州3遺跡)、日本海沿岸地方が8遺跡(出雲地方4遺跡、丹波・越地方4遺跡)、近畿地方が3遺跡と、日本海沿岸、近畿地方に波及し、中期(図10)になると九州地方が4遺跡(北部九州2遺跡、中部九州2遺跡)、日本海沿岸地方4遺跡、瀬戸内海沿岸地方2遺跡、近畿地方10遺跡、東海・関東地方が4遺跡となる。さらに後期(同)になると中部九州1遺跡、日本海沿岸2遺跡、近畿8遺跡、関東地方3遺跡となる。古墳時代になると九州地方からの出土が減少し、日本海沿岸地方、近畿地方で増加しはじめ、中期・後期になると近畿地方で爆発的に増加している。

図9 絹を出土した古墳時代前期の遺跡



注 「倭人の絹—弥生時代の織物文化—」布目順郎による。

図10 絹を出土した古墳時代中期と後期の遺跡分布



注 「絹の東伝—衣料の源流と変遷—」布目順郎による。

布目氏は、この絹を出土する遺跡の推移について、弥生時代に絹文化が発展した北部九州から日本海沿岸の出雲、丹波、越地方に伝播するルート、また瀬戸内海を通り近畿地方へ伝播するルートの2つのルートで東へ伝播していったと分析している（図5参照）。

図9、10を見ると、北部九州といっても福岡県東部の瀬戸内海に面した旧豊前地方からは出土しておらず、瀬戸内海ルートには疑問が付くが、1998年に北九州市小倉北区の「小倉城下屋敷跡」遺跡から長宜子孫銘内行花紋鏡1面が出土した。この鏡は弥生時代後期後半の遺物と考えられており、絹織物2種（羅と平絹）に包まれていた。北九州市からは初めての絹の出土である。北九州市は旧豊前地方にあり関門海峡、瀬戸内海の周防灘に面している。このことから北部九州から瀬戸内海を通過して近畿地方に伝播したということの裏付けになると考えられる。旧豊前地方は発掘調査が進んでおらず、今後調査が進み、絹の出土が増えてくるのではないかと考える。

### c 絹と邪馬台国

「魏志倭人伝」は、倭国においては養蚕が行われ、生糸を紡ぎ、多様な絹織物を生産していると記しており、絹織物の出土する遺跡が存在する地域が倭国に相応すると考えられ、さらに言えば倭国の中心をなす邪馬台国もその地域に存在していたと考えるのが自然である。

弥生時代の絹の出土は、九州北部の福岡県、佐賀県及び長崎県の遺跡に限られており、この出土状況から見限り、「魏志倭人伝」の世界は九州北部が相応し、邪馬台国は北部九州にあったとすることが合理的である。古墳時代前期になると近畿地方の遺跡から絹織物が出土するようになり、中期から後期になると集中的、爆発的に増加する。この推移は、古墳時代前期には近畿地方でも絹文化が芽生え、発展し、中期、後期になると近畿地方が絹文化の中心地となって隆盛を極めるようになってき

たことを示しており、ひいては政治的にも近畿地方の勢力が九州北部を凌駕するようになったものと考えられる。

布目順郎氏は、弥生時代の絹織物はすべて北部九州から出土しており、これから先に近畿地方から出土することがあったとしてもこれまでに北部九州から出た量に匹敵する絹が出ることはまずありえないことと思われ、「魏志倭人伝」に倭とっているのは北部九州を中心とする地域をさしているのではないかとさえ思えてくると述べている。さらに、女王の都する邪馬台国は、養蚕絹織りの観点に立つ限り北部九州にあったとするほうが理屈にあっているように思えると述べている。

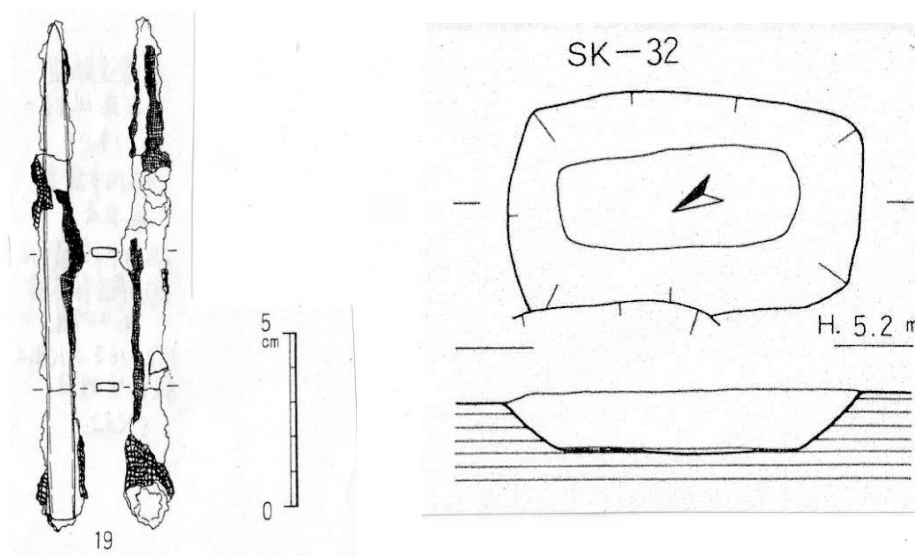
これに対して邪馬台国近畿説の方は、北部九州と近畿における弥生人骨の発見は、北部九州が数千例、近畿は数十例の差があり、さらに北部九州では遺体は甕棺の中にあつて、土と直接接触しないからこそ人骨が残り織物も残るが、畿内は遺体をじかに土に埋めるので布は残らない、北部九州には布はたくさんあったかも知れないが残る確率も高いのであつて、条件の違う北部九州と畿内を比べること自体が考古学の比較としてあやまりだと述べている（「魏志倭人伝の考古学」佐原真 2003 年）。

いずれも高名な研究者である方の論争であり、これに加わることはとてもできる話ではないが、この論法はかつて鉄器の出土は九州地方が極めて大量であることに対して近畿地方は僅かであるとの事実が論じられた際に、近畿においては、鉄はリサイクルされて再利用されているので出土しない、鉄は錆びてなくなってしまったのであつて、これらのことから出土が少ないのだなどの理由を挙げて反論されたことを思い起こされる。考古学は出土した遺物を基に論じなければならないのであつて、出土しない理由を挙げて存在していたのだということを論じてあまり意味のある議論はできないのである。

因みに、弥生時代に吉武高木遺跡（弥生中期）から出土した絹織物は同遺跡三号木棺墓から出土した細形銅矛と細形銅戈に付着していたものである。また、宮の前遺跡（弥生後期）出土の絹織物は、墓壙に埋められた組み合わせ式箱式石棺（C 地点 3 号石棺）内から出土した鈿を包み、これに錆着した状態で見つかっている。さらに唐原遺跡（弥生後期）では住居跡から 1.5 メートルの距離にある土壙（SK-32）から出土した絹織物で、目の細かいものと粗いものの 2 種類で鈿を巻いて埋納されていた（図 11）。小倉城下屋敷跡（弥生時代後期）から出土した絹織物は砂丘上面から検出された内行花文鏡を包んでいたもので、箱式石棺に納められていた可能性のあるものである。これらの絹織物はいずれも甕棺墓から出土したものではなく、甕棺墓以外の遺構からも出土することがあることを物語っている。また、図 9 に記載されている、古墳時代初頭の小谷土壙墓（島根県安来市）は、土壙のなかに木板を組み合わせた木棺が遺存しており、今日的には木棺墓というべきものであるが、副葬品として埋納されていた刀子に絹が巻かれていた。これも木棺墓であり、甕棺墓ではない。なお、安来市史には巻かれていたものは「布」と表記されているが、布目順郎氏の取り扱いに従い、「絹」としている。

また、吉野ケ里遺跡からは、土壌の花粉など植物遺体の分析から一帯にクワが栽培されていたことが明らかにされている。吉野ケ里遺跡からは多数の絹織物が出土するだけでなく、その生産に関わるクワの栽培も行われていたことが確認できるのである。

図 11 唐原遺跡出土の鉞（ヤリガンナ）に付着した絹織物と出土した土壙



注 「唐原遺跡Ⅱ」福岡市教育委員会による。

土壙は長軸 203 cm、短軸 120 cm、深さ 36 cm、長軸方向 N—42 度—E である。

なお、左側の鉞の黒色塗りの部分が銹着した絹織物である。

#### 参考文献

石原道博編訳 「新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 中国正史日本伝（1）」岩波文庫（株）岩波書店 1951 年

全訳注 藤堂明保・竹田晃・影山輝國 「倭国伝 中国正史に描かれた日本」講談社学術文庫（株）2011 年

佐伯有清 「魏志倭人伝を読む」上・下 吉川弘文堂 2000 年

布目順郎 「倭人の絹—弥生時代の織物文化」小学館 1995 年

布目順郎 「養蚕の起源と古代絹」雄山閣 1979 年

布目順郎 「絹と布の考古学」雄山閣 1988 年

布目順郎 「絹の東伝」小学館 1988 年

小林勝利 鳥山國士 「シルクのはなし」技報堂出版 1993 年

間 和夫監修 「わかりやすい絹の科学」文化出版局 1990 年

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所編 佐藤昌憲監修

「絹文化財の世界—伝統文化・技術と保存科学」角川書店 2005 年

社団法人 繊維学会編 「第 2 版 繊維便覧」丸善（株）出版事業部 1994 年

下中直人編集発行 「世界大百科事典」2009 年改訂新版 平凡社 2009 年

日本学術振興協会 「学術月報 VOL32 No.6」日本学術振興会 1979 年

佐原 真 「魏志倭人伝の考古学」岩波書店 2003 年

今鷹誠・小南一郎訳 「正史 三国志 4」筑摩書房 1993 年

福岡県労働者住宅生活協同組合 「宮の前遺跡（A～D 地点）—弥生～古墳時代移行期の墳墓と竪穴の調査報告書—」福岡県労働者住宅生活協同組合 1971 年

福岡市教育委員会 「唐原遺跡Ⅱ -集落遺跡-」 福岡市教育委員会 1989年  
日本蚕糸学会編集 「カイコの科学」 朝倉書店 2020年  
七田忠昭 「吉野ヶ里遺跡-復元された弥生大集落-」 同成社 2005年  
東村純子 「考古学から見た古代日本の紡織」 六一書房 2011年  
安来市誌編さん委員会 「安来市誌」 安来市 1970年  
財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 「小倉城下屋敷跡」(北九州市埋蔵文化財調査報告書 第222集) 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1998年